

# 『義楚六帖』所引志怪資料について

佐野誠子

## — 要旨

義楚の編んだ仏教類書『義楚六帖』における志怪引用の状況を調査した。『搜神記』、『宣驗記』、『冥祥記』といった六朝志怪については、先行する仏教理論書『弁正論』や仏教類書『法苑珠林』に引用される資料からの孫引きがほとんどであり、文字の校勘に使える可能性はあるものの、新たな佚文資料を含んではいなかった。しかし、『列仙伝』、『博物志』、『感応伝』、『集異記』などにおいては、独自の引用も行っており、一部に佚文資料が含まれていることを明らかにした。仏教が外典に博物的な知識を求めていたがために、『博物志』、『集異記』といった書の佚文が残ることとなったのだろう。また、同種の博物知識を伝える書である『漢武洞冥記』についても大量の引用があるが、紙幅の関係もあり、別稿を用意する予定である。

## 1. 『義楚六帖』について

『義楚六帖』<sup>きそりくじょう</sup>(<sup>1</sup>)は、五代の僧侶義楚が編んだ仏教類書である。『義楚六帖』の書名は、唐代の類書『白氏六帖』を意識したものである。『白氏六帖』は千七百の分類項目をたてる。『義楚六帖』も五十部四百四十門の分類をたて、項目を羅列する。『義楚六帖』では、項目の見出しは四文字となっていることが多く、その見出しの下に割り注の形式で、さまざまな書籍からの文章の引用を行う。

自序によれば、五代後晋の出帝開運二年(945)に編纂をはじめ、五代後周の世宗顯徳元年(954)に完成し、朝廷に献上した。もとの書名を『釈氏六帖』というが、現在日本で出されている影印本、研究論文では著者義楚にちなんで『義楚六帖』と呼び習わしているため、本稿でもその呼称に従う。

この『義楚六帖』は、中国においては、北宋の『崇文総目』(1041年成立)の釈書類及び南宋の尤袤の個人蔵書目録『遂初堂書目』釈家類に著録される。『義楚六帖』の南宋刊本につけられた後序によれば、完成後、北宋の開宝六年(973)に刊行され、その後南宋崇寧二年(1103)に再刊したという。しかし、その後は、中国で刊行されることはなく、『大藏経』などにも収録されなかった。その間に、中国では本自体が失われてしまったが、日本の東福寺に南宋刊本が伝わる<sup>(2)</sup>。これが現存最古の版本であり、国宝に指定されている。ま

た、大東急記念文庫には天正八年（1580）写の十二巻本抄本があり<sup>(3)</sup>、建仁寺両足院にも十二巻本の写本が所蔵されているという情報がある<sup>(4)</sup>。

その後、日本では江戸時代に、訓点をつけた刊本が刊行された。刊本は、寛文九年（1669）の京都の飯田忠兵衛刊行本と、延宝三年（1675）の村上勘兵衛刊行本があり、後者は、前者をそのままに刊記のみを変えたものである<sup>(5)</sup>。

東福寺本などの『義楚六帖』は、十二巻であるが、江戸刊本の『義楚六帖』は、二十四巻となっている。これは、一卷の分量が多いために十二巻を機械的に二巻に分割したものであり、両者の構成に大きな違いはない。

また、東福寺本をもとにしたと思われる抄本と江戸刊本の文字の対照を行った『義楚六帖校訛』という写本も存在する（京都大学附属図書館蔵）<sup>(6)</sup>。

中国では、長らく存在が忘れられていた『義楚六帖』だが、江戸刊本をもとにした鉛印本が、『普慧大蔵経』として、民国三十三年（1944）に刊行され、さらに、1985年に『大蔵経補編』に入れられ、1990年に再印本がでている。

現在、『義楚六帖』は、江戸刊本は朋友書店から影印本が出版され、さらに、東福寺本についても臨川書店から『禅学典籍叢刊』の一冊として影印本が出版されており、比較的簡便にみることができる。また、国文学研究資料館の画像データベースでは、西尾市図書館蔵の延宝三年刊の刊本の書影を閲覧できる。本稿では、東福寺本の影印本を底本とし、江戸刊本の影印本によって、文字の異同を確認した。

## 2. 『義楚六帖』引用文献に関する先行研究

類書の価値の一つは、失われてしまった書籍を引用したことによる、佚文の保存にある。また、類書は、失われてしまった書物の断片を保存するのみならず、現存する書物についても現行本未収録の佚文があったり、また場合によっては、現行本よりも良好な（あるいは長文の）テキストが保存されていたりすることがある。

『義楚六帖』に関する研究も、書誌研究をのぞけば、その引用される書籍についての検討がほとんどであった。本節では、その概要を紹介する。

まず、日本における『義楚六帖』の引用文献研究については、山路芳範の一連の研究を参照する必要がある。

山路氏は、『義楚六帖』に引用される僧伝のテキスト比較を中心に行っている。その結果、梁・慧皎『高僧伝』は、現行本とよく文字が一致するが、唐・釈道宣『続高僧伝』は違っていることがあり、現行本よりも古いテキストを保存しているものとして貴重だとする<sup>(7)</sup>。また、『尼高僧伝』として65条の引用文があるが、これは梁・宝唱撰の『比丘尼伝』のことであり、略出、要約があるものの『大正蔵』版の『比丘尼伝』と内容は大きく変わらないと結論する。また、『義楚六帖』に引用される『尼高僧伝』の文字は、高麗本『大蔵経』よりも宋本の『比丘尼伝』とよく一致することを指摘している<sup>(8)</sup>。

それ以外に、現在零本しか存在しない『こんぞうきょう金蔵経』(『衆経要集金蔵論』)も、『義楚六帖』にしか残らない佚文が確認できるとある<sup>(9)</sup>。

その他、『禅学典籍叢刊』の解題においては、唐代の禅門祖師の伝記がおおむね『続高僧伝』と一致しながら、一部別の要素も加味されていること、『宝林伝』と『証道歌』の佚文が確認されることへの言及がある<sup>(10)</sup>。

台湾の趙玉琦は、『義楚六帖』にみえる『説文解字』の引用文を雍熙三年(986)に作られた徐鉉本(大徐本)と対照した結果、文字の違いが多かったことを発見したと報告する<sup>(11)</sup>。

中国大陸においては、書誌研究も行っている銭汝平が、『義楚六帖』に引用される『漢武洞冥記』が現行本にみられない異文を多く含むことについて指摘するものの、本格的な佚文研究は行っていない。

そして、本稿では、『義楚六帖』に引用された志怪と呼ばれる書籍を中心に考察を行う。志怪は、六朝期以降に書かれた、もっぱら怪異の記録のみを記した書である。今回は、やや不可思議な事柄を博物的に記した『博物志』などの書も対象とした。いずれもこれまでの『義楚六帖』引用書研究では、ほぼ検討されていないものである。

六朝志怪は、原本そのものまま現在に伝わる書がない。晋・干宝『搜神記』の二十巻本、劉宋・陶淵明『搜神後記』十巻本、劉宋・劉義慶『異苑』十巻本といった書籍は、一旦、北宋代以降に各種蔵書目録から名前が消えたのち、明末に突如刊本として世に出てきたものである。これら明末の刊本は、唐・歐陽詢編『芸文類聚』、唐・釈道宣編『ほうおんじゅりん法苑珠林』、北宋・李昉等編『太平御覽』及び『太平広記』等の類書に引用される文章をもととしてあらたに作られた再編版であるとみなすのが現在一般的な見解となっている。また、魯迅は『古小説鈎沈』において、魏・曹丕?『列異伝』、劉宋・劉義慶『幽明録』、齊・祖冲之『述異記』といった明末にも単行本が再編されなかった志怪についての輯本を作成している。

『本邦残存典籍による輯佚資料集成』という、日本にのみ残る中国典籍から、佚書の佚文を収集した書籍がある<sup>(12)</sup>。同書は、『義楚六帖』も佚文収集を行う対象の書籍としているが、残念なことに、『宣驗記』、『冥祥記』などの単行本のない書籍のみについての佚文収集であり、『搜神記』、『搜神後記』といった再編集本がある書籍の佚文収集は行っていない。そのため、『義楚六帖』の引用する志怪全般について、改めてどのようなものが引用されているのかを検討する必要がある。

『義楚六帖』に引用される志怪には二つの場合があり、一つは、『義楚六帖』以前の唐・法琳『べんしょうろん弁正論』、『法苑珠林』といった書籍からの孫引きである。もう一つは、『義楚六帖』が独自に書籍から引用したと思われるものであり、こちらは一部新たな佚文資料が含まれている。

後者のうちでは、銭汝平がすでに指摘している『(漢武)洞冥記』が全41条と、もっとも分量が多く、重要であると考えられるが、今回は紙幅の関係で『洞冥記』は別稿に記すこととし、『洞冥記』以外の書籍についての引用の検討を行う。

### 3. 『義楚六帖』 所引志怪について

#### 3-1 引用の概況

まず、『義楚六帖』にどのような志怪が引用されているかの整理を行った。『義楚六帖』が引用する書籍については、引用書名索引が出版されている<sup>(13)</sup>。ただこの索引は、当然のことながら『義楚六帖』の本文で書名が明記されているもののみを採録の対象としている。筆者が『義楚六帖』を調べたところ、幾つかの条は本来志怪を出典としたと思われる文が出典をしるさないまま引用されていた。本稿では、そのような書名が明示されない条についても気が付いた限りの指摘を行う。

また、『義楚六帖』は、先行する仏教書からの引用も多数行っている。今回、仏教類書であり、もとの書籍において引用出典を記さない梁・宝唱『経律異相』、唐・釈道宣『集神州三宝感通録』といった書を引用書名としてあげる条については、検討の対象外とした。

このような作業を経て作成したのが、表1である。

表1 義楚六帖所引志怪一覧（未定稿）

番号	東福寺本 巻数 葉数 頁	江戸刊本 巻数 葉数 頁	見出し	出典	推定書名	仏典との重複	備考
1	1 27b 18	1 22b 11	僧洪鑄像	冥祥記		弁正論 52-537-c	鈎沈 129. 高僧伝、観世音応驗記にもある話
2	1 71b 40	2 51a 40	溺像陰腫	方誌	宣驗記	弁正論 52-540-a	弁正論は宣驗記云。鈎沈 18
3	1 71b 40	2 51b 40	観音愈瘦	感應伝		弁正論 52-537-b	弁正論は感應伝云
4	1 72a 40	2 51b 40	金尊代戮	感應伝		弁正論 52-537-b	弁正論は感應伝云
5	1 72a 40	2 51b 40	謝氏亡子	晋録	冥祥記	弁正論 52-537-c	弁正論は晋録云。鈎沈冥祥記 37 (法苑珠林卷 33)
6	1 72a 40	2 51b 40	孫祚見兒	宣驗記		弁正論 52-537-c	弁正論は宣驗記云。鈎沈 20
7	1 72a 40	2 52a 40	長舒廻風	晋録冥祥記	冥祥記	弁正論 52-537-c	弁正論は晋録冥祥記云。鈎沈 12
8	1 72a 40	2 52a 40	阿練梵語	冥祥記		弁正論 52-537-c	弁正論は冥祥記云。鈎沈 68
9	1 72a 40	2 52a 40	徳祖免難	宣驗記		弁正論 52-537-c	弁正論は宣驗記云。鈎沈 21
10	1 72b 40	2 52a 40	李儒馬驚	なし	宣驗記	弁正論 52-537-c	弁正論は宣驗記云。鈎沈 22
11	1 72b 40	2 52b 40	郭宣処筏	なし	宣驗記	弁正論 52-537-c	弁正論は出典なし。大藏経の注で宣驗記云との校記あり。鈎沈 23
12	1 72b 40	2 52b 40	張応捨那	霊鬼誌	霊鬼志	弁正論 52-538-a	弁正論は霊鬼志曰。鈎沈 24
13	1 73a 41	2 53a 41	康阿得死	幽明録		弁正論 52-538-a	弁正論は幽明録曰。鈎沈 264
14	1 73a 41	2 53a 41	長和飯僧	幽明録		弁正論 52-538-a	弁正論は幽明録曰。鈎沈 265
15	1 73a 41	2 53a 41	趙秦精思	幽明録		弁正論 52-538-b	弁正論は幽明録云。鈎沈 247
16	1 73a 41	2 53b 41	王坦死驗	續搜神記	搜神後記	弁正論 52-539-a	弁正論は続搜神記云。搜神後記巻 9
17	1 73b 41	2 53b 41	臨刑免刀	宣驗記		弁正論 52-539-a	弁正論は出宣驗記也及続搜神記。鈎沈 8
18	1 73b 41	2 53b 41	王襲得書	なし	宣驗記	弁正論 52-539-a	弁正論は出典なし。大藏経の校勘記で、出宣驗記という文字あり。鈎沈 24
19	1 73b 41	2 53b 41	郭銓現身	なし	冥祥記	弁正論 52-539-a	弁正論は出宣驗記。鈎沈 79 (法苑珠林にあり)
20	1 73b 41	2 54a 41	兪文泛海	なし	宣驗記	弁正論 52-539-a	弁正論は出宣驗記。鈎沈 26
21	1 73b 41	2 54a 41	文和死信	なし	冥祥記	弁正論 52-539-a	弁正論は出宣驗記。鈎沈 44 (法苑珠林にあり)
22	1 73b 41	2 54a 41	経堂不焼	なし	宣驗記	弁正論 52-539-b	弁正論は出宣驗記。鈎沈 5

番号	東福寺本 巻数 葉数	頁	江戸刊本 巻数 葉数	頁	見出し	出典	推定書名	仏典との重複	備考
23	1	73b 41	2	54a 41	蒲城失火	幽明録	宣驗記	弁正論 52-539-b	弁正論は出宣驗記。鈎沈 28
24	1	74a 41	2	54a 41	沈英陸暉	呉誌	宣驗記	弁正論 52-539-b	弁正論は出宣驗記。鈎沈 7
25	1	74a 41	2	54a 41	車母然灯	宣驗記		弁正論 52-539-b	弁正論は出宣驗記。鈎沈 6
26	1	74a 41	2	54b 41	吏部放生	宣驗記		弁正論 52-539-c	弁正論は出瓊別伝。鈎沈なし。
27	1	74a 41	2	54b 41	史雋造像	幽明録		弁正論 52-539-c	弁正論は出宣驗冥祥等記。鈎沈の幽明録になし。鈎沈宣驗記 7
28	1	74b 41	2	55a 42	鄭鮮純命	宣驗記		弁正論 52-539-c	弁正論は出宣驗記。鈎沈 31
29	1	74b 41	2	55a 42	遣民愈病	なし	宣驗記	弁正論 52-539-c	弁正論は出宣驗記。鈎沈 33
30	1	74b 41	2	55a 42	丁零射仏	宣驗記		弁正論 52-539-c	弁正論は宣驗記云。鈎沈 35
31	1	74b 41	2	55a 42	赫連被像	宣驗記		弁正論 52-539-c	弁正論は宣驗記云。鈎沈 34。ともに末尾に蕭子顯の齊書にあるとあり
32	1	75a 42	2	56a 42	朱恭殺尼	搜神記	備考参照	弁正論 52-543-a	弁正論は出搜神録。搜神後記の佚文か。李劒国の点校本が搜神後記の佚文として採録する
33	1	75b 42	2	56a 42	孤訓剥佛	なし	冥報記	法苑珠林 53-989-b	法苑珠林には出典を記さない。太平広記巻 116 で出典が冥祥記となっているが、唐代の事件であるため、冥報記であろうとの推定がなされている(『太平広記会校』) 現行の冥報記にはみられない佚文
34	1	75b 42	2	56a 42	徹公差頼	なし	冥報記	法苑珠林 53-989-b	法苑珠林は出典を冥報拾遺とする。冥報記巻上
35	2	20b 53	3	26b 55	謝敷経験	なし	冥祥記	法苑珠林 53-418-a	珠林は出冥祥記。鈎沈 35
36	2	20b 53	3	26b 55	智通児死	冥祥説	冥祥記	法苑珠林 53-418-c	珠林は出冥祥記。鈎沈 82
37	2	34a 60	4	5a 65	羊祐識環	法苑	冥祥記	法苑珠林 53-479-b	珠林は出冥祥記。鈎沈 2
38	2	34a 60	4	5b 65	王練子活	なし	冥祥記	法苑珠林 53-479-c	鈎沈 82。珠林は出冥祥記
39	2	41a 64	4	14b 69	造塔重活	幽明録		弁正論 52-538-a	弁正論は幽明録日。鈎沈 264
40	2	41b 64	4	14b 69	石賢飯僧	幽明録		弁正論 52-538-b	弁正論は幽明録日。鈎沈 265
41	4	21a 117	7	27b 136	老氏骰子	博物志			出所不明
42	4	23a 118	7	30a 137	懷夢之草	洞冥	洞冥記		巻 3
43	4	66a 139	8	54b 166	博奕偏執	唐臨冥報記	冥報記	法苑珠林 53-876-b	珠林は出冥報記
44	6	68b 224	12	33a 280	僧洪像聖	なし	備考参照	高僧伝 50-410-c	繫觀世音応驗記や高僧伝にみられる話。おそらくここは他の話のならばからすれば、高僧伝からとっている
45	7	35a 252	14	4a 314	方朔李充	洞冥記			巻 1、巻 2
46	7	43a 256	14	14b 319	鑿齒送梨	集異記			出所不明
47	7	49b 259	14	22b 323	五丈大足	洪範五行伝		法苑珠林 53-307-c	珠林は鴻範五行伝日。搜神記巻 6
48	7	49b 259	14	23a 324	身腹圍等	神異経		法苑珠林 53-307-c	珠林は神異経日
49	7	49b 259	14	23a 324	一步千里	神異経		法苑珠林 53-307-c	珠林は神異経日
50	7	50b 259	14	24a 324	人至短小	洞冥記			巻 2
51	8	21b 280	16	5b 350	麗媚玉質	洞冥記			巻 4
52	8	25b 282	16	11a 353	談生幽婚	法苑		法苑珠林 53-850-a	珠林は出搜神記。文章が節略されているが、盧充が続くのも同じ。搜神記巻 16
53	8	27b 283	16	13b 354	開塚取婦	法苑		法苑珠林 53-850-c	珠林は出搜神記。搜神記巻 15
54	8	27b 283	16	13b 354	仲文喪女	なし	搜神後記	法苑珠林 53-851-a	珠林は出続搜神記。搜神後記巻 7
55	8	27b 283	16	13b 354	徐女再生	なし	搜神後記	法苑珠林 53-851-a	珠林は出続搜神記。搜神後記巻 4
56	8	28a 284	16	14a 354	廟中戲婚	なし	搜神記	法苑珠林 53-851-b	珠林は出志怪伝。搜神記巻 5。
57	8	50a 295	16	42b 368	彭娥入石	法苑	幽明録	法苑珠林 53-532-a	珠林は出幽明録。鈎沈 69
58	8	50a 295	16	42b 368	燕莊子儀	冤魂録	冤魂志	法苑珠林 53-628-b	珠林は出冤魂志
59	8	50b 295	16	43a 369	李旦暴死	幽冥録	冥報記	法苑珠林 53-315-a	鈎沈でみつからず。珠林は出



番号	東福寺本 巻数 葉数 頁	江戸刊本 巻数 葉数 頁	見出し	出典	推定書名	仏典との重複	備考
							冥報記。冥祥記であった可能性
60	8 50b 295	16 43b 369	鬼方石室	神異経		法苑珠林 53-316-c	珠林は依神異経曰として引き、出典を御覧（修文殿御覧を指すと考えられる）とする
61	8 50b 295	16 43a 369	売鬼為羊	なし	列異伝・搜神記	法苑珠林 53-316-c	珠林は出列異伝。搜神記巻16、鉤沈列異伝 28
62	8 51a 295	16 44a 369	五気化成	千宝記	搜神記	法苑珠林 53-530-b	珠林は千宝記云。搜神記巻12千宝変化論
63	8 51a 295	16 44a 369	変化各異	法苑	搜神記	法苑珠林 53-530-c	珠林は千宝記云。搜神記巻12千宝変化論
64	8 51a 295	16 44a 369	化羊釣魚	なし	搜神記	法苑珠林 53-531-a	珠林は出搜神記。搜神記巻1
65	8 51a 295	16 44b 369	女化怪草	なし	搜神記	法苑珠林 53-531-b	珠林は出搜神記。搜神記巻14
66	8 51b 295	16 44b 369	夫子厄陳	法苑	搜神記	法苑珠林 53-532-a	珠林は出搜神記。搜神記巻19
67	8 51b 295	16 44b 369	炎帝娃娃	なし	山海経	法苑珠林 53-532-b	珠林は出山海経。山海経巻3北山経
68	8 51b 295	16 44b 369	人有飛頭	なし	搜神記	法苑珠林 53-532-c	珠林は出搜神記。搜神記巻12
69	9 13b 303	17 16b 378	女撃雷車	搜神記	搜神後記	法苑珠林 53-639-b	珠林は出続搜神記。搜神後記巻5
70	9 26a 310	18 8a 387	竜鐘石	洞冥記			巻2
71	9 30a 312	18 13a 390	湖万千里	神異記		法苑珠林 53-495-c	珠林は出神異経
72	9 33a 313	18 17a 392	甜水虞泉	洞冥	洞冥記		巻2
73	9 35b 314	18 20a 393	甘露池	洞冥	洞冥記		巻1
74	9 41a 317	18 26b 396	口吐猛火	集異記			出所不明
75	9 41a 317	18 27a 397	五色煙火	搜神記		法苑珠林 53-992-a	珠林は出搜神記。搜神記巻1
76	9 42b 318	18 28b 397	紫金之灯	洞冥記			巻2、巻3
77	9 44a 319	18 30b 398	鳴禽苑	洞冥	洞冥記		巻3
78	9 49b 321	18 37b 402	樹似人形	なし	搜神記	法苑珠林 53-769-b	珠林は出搜神記。搜神記巻6
79	9 49b 321	18 37b 402	伐樹復立	なし	搜神記	法苑珠林 53-769-b	珠林は出搜神記。搜神記巻6
80	9 49b 321	18 37b 402	宿昔暴長	なし	搜神記	法苑珠林 53-769-b	珠林は出搜神記。搜神記巻6
81	9 49b 321	18 37b 402	伐樹出血	なし	搜神記	法苑珠林 53-769-c	珠林は出搜神記。搜神記巻18
82	9 50a 322	18 38a 402	桑樹蚕因	なし	搜神記	法苑珠林 53-769-c	珠林は出搜神記。搜神記巻14
83	9 50b 322	18 38b 402	漆樹	洞冥	洞冥記		江戸刊本は、見出しを「漆樹似樽」とする。「似樽」は東福寺本では、割り注部分の冒頭二文字。巻3
84	9 54a 324	18 42b 405	延寿三百	述異記		法苑珠林 53-572-c	珠林は出述異記。鉤沈3
85	9 55a 324	18 43b 405	紫髯梨	洞冥	洞冥記		巻2
86	9 55b 324	18 45b 406	細囊有膏	洞冥記			巻2
87	9 56b 325	18 46b 406	聞雷而長	洞冥	洞冥記		巻3
88	9 56b 325	18 46b 406	草如人状	なし	搜神記	法苑珠林 53-769-c	珠林は出搜神記。搜神記巻6
89	9 56b 325	18 46b 406	碧草如麦	洞冥	洞冥記		巻2
90	9 57b 325	18 48a 407	竹王廟	法苑	異苑	法苑珠林 53-764-a	珠林は出異苑。異苑巻5。また任昉述異記巻下
91	9 58b 326	18 49a 408	胡菱不食	博物誌	博物志	一切経音義 54-489-a	文はあまり一致しない。博物志巻6「張騫使西域還、乃得胡桃種」。齊民要術所引佚文のところにも類似文章あり
92	9 59b 326	18 50b 408	鳳葵丹色	洞冥経	洞冥記		巻3
93	10 28b 342	19 35a 427	金施百億	洞冥	洞冥記		出所不明
94	10 28b 342	19 35b 427	金施百億	法苑	搜神記	法苑珠林 53-658-c	珠林は出劉向孝子伝。搜神記巻11に収められるが、文章は珠林のものとは違う
95	10 32b 344	19 40b 429	涙珠照月	洞冥記			巻2
96	10 33a 345	19 41b 430	玉仏数尺	洞冥	洞冥記		巻2
97	10 47b 352	20 13a 440	麗娟歌舞	洞冥	洞冥記		巻4
98	10 52b 354	20 19b 443	香薰十里	博物誌	博物志	法苑珠林 53-573-a	珠林は博物志曰。太平御覧などにも引用される
99	10 53a 355	20 20b 443	兜末神香	十州記		法苑珠林 53-574-a	珠林は、前半は、漢武故事曰

番号	東福寺本 巻数 葉数	頁	江戸刊本 巻数 葉数	頁	見出し	出典	推定書名	仏典との重複	備考		
									として引用。後半は、十洲記 曰として引用		
100	10	53a	355	20	20b	443	驚精香	十州記	法苑珠林 53-574-a	江戸刊本は見出を「驚精白」 に作る。珠林は十洲記曰	
101	10	53b	355	20	20b	443	神精香	洞冥記		巻1、巻2	
102	10	67b	362	20	38b	452	毛眉白黒	洞冥記		巻2	
103	11	4a	368	21	4b	458	吉雲国	洞冥記	仏祖統記 49-459-b	仏祖統記に類似の文がある。 巻2	
104	11	25a	379	21	32b	472	鉢塔宝成	感應伝		出所不明	
105	11	34b	383	21	44b	478	神明台	洞冥記	洞冥記	巻2、巻3	
106	11	35a	384	21	45a	479	寿靈壇	武帝洞冥記	洞冥記	巻1	
107	11	54a	393	22	23a	492	履屣不帶	洞冥記	洞冥記	巻4	
108	11	58b	395	22	28a	494	以衣為枕	洞冥記	洞冥記	巻4	
109	11	62b	397	22	33b	497	玉釵留王	洞冥記		巻2	
110	11	65b	399	22	37a	499	錦從井出	洞冥記		巻2	
111	12	5a	403	23	6a	503	紐鎧編兜	集異記		出所不明	
112	12	16b	409	23	20b	510	覆缸之所	搜神記	法苑珠林 53-572-c	珠林は統搜神記曰。搜神記卷 16。搜神後記巻6	
113	12	16b	409	23	20b	510	鯛為赤馬	洞冥記	洞冥記	巻3	
114	12	18a	410	23	22b	511	虎竜七尺	洞冥記		巻3	
115	12	22a	412	23	27a	514	巨靈之龜	洞冥記		巻3、巻4	
116	12	22a	412	23	27b	514	黄安亀背	洞冥記	洞冥記	巻2	
117	12	22a	412	23	27b	514	跛鼈凌驥	列伝	列仙伝	広弘明集 52-231-a	江戸刊本は出典を列仙伝に作 る。現行の列仙伝にはみえず
118	12	25a	413	23	31b	516	人変為魚	搜神記	搜神記	法苑珠林 53-521-b	2条まとめて引用される。珠 林は前半を述異記曰として引 用し、後半を搜神異記を出典 とする。述異記は鈎沈70。搜 神異記は搜神記巻1
119	12	25a	413	23	31b	516	魚生翅角	列仙伝		法苑珠林 53-665-a	珠林は出列仙伝
120	12	26b	414	23	33b	517	丹蝦十丈	洞冥記	洞冥記		江戸刊本は見出しを母蝦十丈 に作る。巻4
121	12	29a	415	23	36b	518	螻蛇遊路	洞冥記			巻2
122	12	40b	421	23	51a	526	遠飛鷄	洞冥記			巻3
123	12	41a	421	23	51b	526	鴿変為兒	冥報記	冥報拾遺	法苑珠林 53-665-c	珠林は出冥報拾遺。
124	12	43b	422	23	53b	527	蠅入鼻癩	法苑引怨魂記		法苑珠林 53-822-b	珠林は出所を示さない。その 前の条までが出典を怨魂記 (すなわち顔之推の冤魂志) としていることから、誤って 怨魂記としたか
125	12	44b	423	23	56a	528	螻蛄有神	法苑	搜神記	法苑珠林 53-755-c	珠林は出搜神記。搜神記巻20。 他幽明録にもあり。鈎沈158
126	12	44b	423	23	56a	528	結草蟲	洞冥記	洞冥記		巻2、巻3
127	12	45a	423	23	56a	528	青雀赤雀	洞冥記	洞冥記		巻4
128	12	45b	423	23	57a	529	細鳥	洞冥記			巻2
129	12	54a	428	24	11a	535	馬有七名	洞冥記	洞冥記		巻2
130	12	58a	430	24	16a	537	大秦花蹄	洞冥記	洞冥記		巻2
131	12	59a	430	24	17b	538	土缶井羊	法苑	搜神記	法苑珠林 53-320-b	珠林は出搜神記。搜神記巻12
132	12	68a	435	24	29a	544	飛骸獸	洞冥記	洞冥記		巻1

表・凡例

- \* 東福寺蔵南宋刊本及び江戸刊本の巻数、葉数（表・裏はそれぞれa・bで表記した）を記した。また利用した影印本のページ数を参考にあげた。
- \* 出所位置については、見出し位置とは限らない。引用文によっては、割り注の途中からはじまる場合があり、そのときの出所は当該書名・内容があらわれるところとした。
- \* 出典名は、底本にしたがい、そのあとに推定される書名が表記がことなる場合はそれを示した。「なし」とあるのは、『義楚六帖』では出典名がしるされていない文である。
- \* 仏典との重複は、仏典にみえる文について、經典名、大藏經の何巻何頁（上中下段の別をa・b・cで表記した）を記した。
- \* 備考欄には、仏典以外の書籍の出所、文字の異同等を示した。「出所不明」とあるものは、『義楚六帖』の他に類似の文をみつけれなかったものである。

表1では、仏典との重複という項目を設け、『弁正論』、『法苑珠林』などの『義楚六帖』に先立つ仏典に同内容がみえるものを指摘した。また、現行の志怪単行本、あるいは魯迅『古小説鈎沈』に採録されている場合は、その出処を備考欄に記した。

### 3-2 類書からの孫引きと考えられる条について

表1の類書状況の項目をみると、132条中86条が、『弁正論』、『法苑珠林』などの仏典にもみえる文であることがわかる。山路氏がすでに、『義楚六帖』にみえる劉宋・劉義慶による仏教志怪『宣驗記』が『弁正論』からの孫引きであることを指摘しているが<sup>(14)</sup>、『宣驗記』のみならず、『搜神記』、『幽明録』、『冥祥記』といった六朝志怪の代表的な書籍は、いずれも『弁正論』あるいは『法苑珠林』からの孫引きである。また、両者の本文を検討してみても、文章に節略はあるものの、『義楚六帖』の引用文において、もとの書籍に引用されたものを逸脱することはない。引用の順序についても、ほぼもとの書籍によっている。

とくに目立つのが『弁正論』巻七と『義楚六帖』との重複である。『弁正論』巻七は「信毀交報篇」と題して、58条の話を志怪などから引用している。実にそのうちの41条が『義楚六帖』に引用されている。41条のうち、3条が他所に引用されているのを除くと、38条が『義楚六帖』の信奉謗毀部第二・謗毀報応の項目に集中してとられている<sup>(15)</sup>。『弁正論』巻七では、後半におかれる「孫皓溺像陰疼累月」が、『義楚六帖』では、分類のはじめの方に配置されている他は、同じ順序で並べられている。これは明らかに、『弁正論』を見て、そのまま引用したと考えるべきであろう。

ただし、『義楚六帖』は『弁正論』の一部の話を引用していない。引用されていない条の『弁正論』における見出し及び出典を以下に示す。

1. 「高王行刑而刀折」(なし)
2. 「久鬼多慧。能現怪而飽餐。新鬼無知。入仏家而転磨」(『遍略』)
3. 「張達被放至意修斎」(『張氏別伝』)
4. 「廟神奉絹即離蟒身」(『晋塔寺記』)
5. 「陳範之妻連光曜座」(『宣驗』『冥祥』等記)
6. 「張導之母吐焰暉盤」(『宣驗記』)
7. 「尚書劉式至念像婦」(『宣驗記』)
8. 「呉王困寺執僧。舍利浮光於鉢上」(『呉録』及『宣驗記』)
9. 「平業融像而眼盲」(『梁後記』)
10. 「鎮惡盜鍾而舌縮」(『王氏家誠』)
11. 「祖深献書而著白癩」(『冤魂記』)
12. 「元嵩上法而患熱風」(なし)
13. 「上客死而羊鳴」(『顔氏』)
14. 「県令醒而瘡発」(『顔氏家訓』)
15. 「部曲生男自然無手。朝請噉炙如劍入身」(『顔氏家語』)



16. 「梁人沐髮頂上鷄声」(『顔氏家訓』)

17. 「劉氏壳羹兒頭似鱒」(『顔氏家語』)

これらの引用されなかった文は、比較的多くの文が長いものが多い傾向があるが、短いものもあり、採録の基準は不明である。また、10の「鎮惡盜鐘而舌縮」以降巻末までは連続して引用されていない。そして、『義楚六帖』は、『義楚六帖』で、表1の32番「朱恭殺尼」の次に、もう1条『後梁記』を出典とする「董礼却僧」を引用したあと、『法苑珠林』から出典を明記しないで唐代の事件(『冥報記』が出典と考えられるもの)を引用している。

『義楚六帖』で出典をしるしていない場合は、どのような意図があるのだろうか。

表1の11番「郭宣処筏」と18番「王襲得書」は、『義楚六帖』で出典がしるされておらず、『大蔵経』の『弁正論』本文でも出典がしるされていない。しかし、『大蔵経』の校勘記に「『宣驗記』云」となっている版本があることが指摘されている。また、魯迅は『古小説鉤沈』の『宣驗記』にこれらの話を収録している。ここからわかるのは、『義楚六帖』が参照した『弁正論』でもすでに、引用書名が脱落していた可能性があること、そして、魯迅が参照した『弁正論』には、『宣驗記』からと記されていたために、『古小説鉤沈』に採録されたことである<sup>(16)</sup>。

表1の19番「郭銓現身」と21番「文和死信」は、『義楚六帖』では出典をしるさないが、『大蔵経』の『弁正論』では、出典を『宣驗記』にしている。これらの文を魯迅は『法苑珠林』によって『冥祥記』の文として採録している。実際に『法苑珠林』では、『冥祥記』からとして引用される文章である。しかし、しかし魯迅は『宣驗記』の佚文としては採録していない。これらの『冥祥記』佚文については、王国良が『冥祥記研究』<sup>(17)</sup>の「佚文来源と相関材料」で、『弁正論』の書名はあげていないが、すでに『宣驗記』にもみえるとの指摘をしている。これも魯迅がみた『弁正論』では『宣驗記』の名が落ちていた可能性がある。また、『義楚六帖』が参照した『弁正論』でも出典が落ちていた可能性があるということにもなる。

このように、『義楚六帖』が引用書名をあげない場合、『義楚六帖』が見た『弁正論』なり『法苑珠林』なりがすでに引用書名が脱落していたり、現行の『大蔵経』本と引用書名が違ってしまっていたりした可能性もある。

また、出典を調べると、時折、『弁正論』や『法苑珠林』の引用文と『義楚六帖』とで出典が違っている場合がある。このような場合の両者の文章を並べ比較の作業を行いたい。

#### (1) 2番

〔義楚六帖：溺像陰腫〕『方誌』云、吳孫皓得金銅佛、尿之灌頂。立感陰腫痛不可忍。太官卜曰「爲犯大神、遍禱神祇、皆不能愈」。有宮人事佛、奏請求佛。依言求之。立愈。生信供養。或云僧會奏。

〔弁正論：孫皓溺像陰疼累月〕『宣驗記』云、吳主孫皓性甚暴虐。作事不近人情。與綵女看治園地土。下忽得一軀金像。形相明嚴。皓令置像廁傍。使持屏籥。到四月八日、皓

乃溺像頭上。笑而言曰「今是八日爲彌灌頂」。對諸姝女以爲戲樂。在後經時陰囊忽腫。疼痛壯熱不可堪任。自夜達晨苦痛求死。名醫上藥治而轉增。太史占曰「犯大神、所爲勅令、祈禱靈廟」。一禱一劇、上下無計。中宮有一姝女、先奉佛法。內有所知。凡所記事往往甚中。奏云「陛下求佛圖未」。皓問「佛大神耶」。女曰「天上天下尊莫過佛。陛下前所得像猶在廁傍。請收供養。腫必立差」。皓以痛急即具香湯。手自洗像置之殿上。叩頭謝過一心求哀。當夜痛止腫即隨消。即於康僧會請受五戒。起大佛寺供養衆僧也。

『義楚六帖』で出典となっている『方誌』という書籍は、唐・釈道宣の『釈迦方誌』を指すのだろうか。『釈迦方誌』は『大藏經』第51巻に収められる。確かに、孫皓の事跡が載っており、孫皓が仏教を排斥しようとしたこと、仏像に小便をかけて、陰部が痛くなったことなどが書かれてはいる。しかし、文章については、『弁正論』が引用する『宣驗記』との方が、『方誌』の文よりも類似性は高く、仏教を信仰する姝女の進言の部分も『弁正論』と『義楚六帖』の両者間でのみ一致し、『方誌』にはみられない。また、『義楚六帖』最後の「或云僧會奏（もしくは僧侶達が集まって進言したともいう）」の附記は、他にはない情報である。義楚が『弁正論』以外の資料から、つけ足した可能性がある。

## (2) 23 番

〔義楚六帖：蒲城失火〕元嘉八年、河東蒲坂城内失火、不可救。唯寺及經像大小不燒。人共驚嘆。出『幽明錄』記之。

〔弁正論：蒲城失火精舍不然〕元嘉八年、河東蒲坂城大失火、不可救。唯精舍大小儼然。反白衣家經像皆不損墜。百姓驚異倍共發心。出『宣驗記』。

同じ劉義慶の手になる『幽明錄』と『宣驗記』は、『幽明錄』が一般的な幅広い内容を含む志怪であるのにたいし、『宣驗記』は劉義慶晩年の仏教信仰に目覚めたあとに編纂したものであり、仏教に関する話、なかでも応驗譚を中心としている<sup>(18)</sup>。火事で寺と經典と仏像だけが焼けなかったという内容からすれば、『幽明錄』よりは『宣驗記』の方がより適切なものかもしれない。『義楚六帖』の文章は、『弁正論』と比較して、短く、出典が違うことを除けば、新しい情報はつけ加えられていない。

## (3) 24 番

〔義楚六帖：沈英陸暉〕『吳誌』云、沈英、陸暉俱爲事合死。令家屬造觀音像。兼自稱念。臨刑、三刀皆折。官問之故。答云「恐是觀音慈力」。及看像項上。三刀痕在。因奏獲免死罪。

〔弁正論：吳郡市中刑囚免戮〕吳郡人沈英被繫處死。臨刑市中日誦觀世音名號。心口不息。刀刃自斷。因而被放。一云。吳人陸暉繫獄分死。乃令家人造觀世音像。冀得免死。

臨刑、三刀其刀皆折。官問之故。答云「恐是觀世音慈力」。及看像項上。乃有三刀痕。見因奏獲免。出『宣驗記』。

『吳誌』は、三国時代呉の歴史を記録した書と推測されるが、『隋書經籍志』（以下『隋志』と略）などには著録されず詳細不詳である。『義楚六帖』は出典を先にあげるのにたいし、『弁正論』は末尾にあげる。ちなみに、この話は『太平広記』巻一百十一でも出『宣驗記』として引用される。

(4) 26 番

〔義楚六帖：吏部放生〕吏部尚書孔瓊字彥寶。素不信佛。因與范泰四月八日至瓦官寺共放生懺悔。死後數旬、託夢與兄弟云「吾本不信佛。因與范泰放生。乘一善力今脫苦。罪福報應決定不差。汝當勵心爲福助吾。興善、可以脫苦」。出『宣驗記』。

〔弁正論：吏部孔瓊。由放生而脫苦〕吏部尚書孔瓊字彥寶。素不信佛。因與范泰四月八日至瓦官寺共放生懺悔。死後數旬託夢與兄子云「吾本不信佛。因與范泰放生。乘一善力今得脫苦。罪福報應決定不差。汝當勵心爲福助吾興善。可以脫苦也」。出『瓊別傳』也。

こちらは(1)で取りあげた2番とは逆に、『義楚六帖』が出典を『宣驗記』とし、『弁正論』が出典を『瓊別傳』という別伝(個人伝記)としている例となる。孔瓊という人物については、他に資料がない。話中に出てくる瓦官寺は、東晋興寧二年(364)に南京に建立された寺である。

(5) 27 番

〔義楚六帖：史雋造像〕『幽明録』云、史雋道士有學識、奉道而慢佛。常語人言「佛是小神、不足事爾」。每見佛像、恒輕誚之。後因脚疾攣縮。種種祈福無應。友人趙文謂曰「佛福第一。可試造觀音像」。雋以病急如言造之。夢觀音菩薩降神而愈。因發信心也。

〔弁正論：道士史俊。因灌像而能行〕史俊者學識奉道而慢佛。常語人云「佛是小神不足事耳」。每見尊像恒輕誚之。後因病脚攣。種種祈福都無効驗。其友人趙文謂曰「經道福中灌像福第一。可試造觀音像」。俊以病急如言灌像。像成夢見觀音遂差。出『宣驗』『冥祥』等記。

『義楚六帖』がはじめに「『幽明録』云」とするのに対し、『弁正論』は末尾で「『宣驗』『冥祥』等記」とし、はっきりと出典を示していない。魯迅『古小説鈎沈』では、この話を『幽明録』のものとしては収録していない。

(6) 59 番

〔義楚六帖：李旦暴死〕『幽冥録』元嘉（江戸刊本は「喜」に作る）三年正月十四日、暴死。心暖、七日重活。具細説地府善惡報應罪福。冤對不虛等事。

〔法苑珠林〕宋李旦、字世則。廣陵人也。以孝謹質素、著稱鄉里。元嘉三年正月十四日暴死。心下不冷、七日而蘇。哈以飲粥。宿昔復常云「有一人。持信幡來至床頭稱。『府君教喚』。旦便隨去。直北向行、道甚平淨。既至城閣高麗似今宮闕。遣傳教慰勞問呼。旦可前至。大廳事上見有三十人。單衣青幘列坐森然。一人東坐披袍隱机。左右侍衛可有百餘。視旦而語坐人云。當示以諸獄令世知也。旦聞言已。舉頭四視、都失向處。乃是地獄中。見群罪人受諸苦報。呻吟號呼不可忍視。尋有傳教稱『府君信君可還去。當更相迎』。因此而還」。至六年正月復死。七日又活。述所見事較略如先。或有罪囚寄語報家道。生時犯罪使爲作福。稍説姓字親識鄉伍。旦依言尋求皆得之。又云。甲申年當行疾癘殺諸惡人。佛家弟子作八關齋。戒修心善行可得免也。旦本作道家祭酒。即欲棄録本法。道民諫制。故遂兩事。而常勸化作八關齋。……右三驗出『冥報記』也

魯迅は『古小説鈎沈』でこの『法苑珠林』の李旦の話を『冥祥記』のものとしている。元嘉は、劉宋文帝の年号である（424-453）。この元号からすれば、出典は隋唐の話中心の『冥報記』はふさわしくなく、『冥祥記』あるいは、『義楚六帖』のいう『幽冥（明）録』が出典であった可能性がある<sup>(19)</sup>。

このように、文章本文に関しては『義楚六帖』の方が『弁正論』や『法苑珠林』より詳しいということはない。これは、『義楚六帖』が『弁正論』、『法苑珠林』を引用していることの更なる補強材料となろう。そして、出典の違いについては、とくに出典を示す位置が両者で文頭と文末と違うことがあること、先に魯迅『古小説鈎沈』の例でみたように、『弁正論』自体の出典の表記が版本によって抜けがあったりしたことからすれば、一概に『義楚六帖』が誤って引用したとは言えない。

ただし、表1の32番「朱恭殺尼」で『義楚六帖』が出典を『搜神記』としているのは完全に誤りで、『弁正論』が『搜神録』としているものは、話の事件発生年からして、現在でいう『搜神後記』の話に該当する<sup>(20)</sup>。69番「女撃雷車」も同様である。

また62番「五氣化成」と63番「変化各異」は、もともとは『法苑珠林』に引用される千宝「変化論」を二つにわけたものであるが、前半にあたる62番の出典を千宝記（『搜神記』の著者名千宝を誤って「千宝」としたと考えられる）、後半にあたる63番の出典を『法苑』とするといった扱いがみられる。また、118番の「人変為魚」は『搜神記』云として2条の魚への変身譚を引用するが、依拠している『法苑珠林』では前半の話は『述異記』からとして引用され、後半は『搜神異記』からとなっており、『述異記』が無視されている。

『義楚六帖』により、これら六朝志怪の未知の佚文を知ることができなかった。しかし、出典のずれに関しては、間違いも含みつつ、また依拠した『弁正論』のテキストの問題も

明らかにし得た。

### 3-3 類書からの孫引きではないと考えられるものを含む佚文資料

『搜神記』、『幽明録』、『宣驗記』、『冥祥記』といった六朝志怪、また前漢・東方朔の撰に擬される地理書『神異経』や『十州記』の引用は、原則『弁正論』や『法苑珠林』からの引用であった。しかし、『義楚六帖』にはところどころに、仏典にみられない引用がある。

先にするしたように『漢武洞冥記』はあまりにも条数が多いため、今回は検討しない。それ以外の数条のみを引用する書籍について、成立が古いと考えられる順（偽託の撰者の場合、その偽託された撰者の生きた時代順）に、引用文の出処及び佚文であるか否かの判断を行っていきたい。

#### (1) 『列仙伝』

『列仙伝』は、前漢・劉向の撰と偽託される（実際は後漢頃の成立ではないかとされる）、神仙の伝記を集めた書である。現在明の正統年間（1436-1449）に出た『道蔵』に収められる上下巻本が伝わるが、多くの佚文資料がある<sup>(21)</sup>。

『義楚六帖』には、2条の引用があり、表1の119番「魚生翅角」は、『法苑珠林』に『列仙伝』からとして引用されるものであり、現行の『列仙伝』巻下にある子英の伝の内容である。しかし、117番の「跛鼈凌驥」は、『列仙伝』にみえない。

〔跛鼈凌驥〕『列傳』（江戸刊本は『列仙傳』に作る）云、孔老方於大聖、可謂子。如子貢賢於仲尼、跛鼈凌驥。

出典の表記が東福寺本では『列伝』となっており、江戸刊本で『列仙伝』となっている。『列仙伝』巻上に老子の伝はあり、孔子が老子に弟子入りしたという記述を載せてはいるが、このような評価の文章は含まれていない。文中の「子貢賢於仲尼（子貢は仲尼より賢れり）」という言葉は『論語』子張篇にみられるものである。そして、この文と類似の文が、唐・釈法琳「広析疑論」（『広弘明集』巻十八、『大正蔵』52-231-a）及び唐・釈道宣『集古今仏道論衡』（『大正蔵』52-384-c）にみえ、文意もわかりやすいが、こちらでは『列仙伝』にみえるといった言及はない。釈法琳「広析疑論」の文をあげる。

若將孔老以匹聖尊、可謂子貢賢於仲尼、跛鼈陵於駿驥。

『義楚六帖』の老子についての文は、『列仙伝』にあった文というよりは、『義楚六帖』が出典を誤ってしるした可能性が高いだろう。



## (2) 『博物志』

『博物志』は晋の張華が編んだ、百科知識を断片的に集めた書である。現在十巻本が伝わるが、後世の再編本であり、諸書に多くの佚文資料が残る。范寧の『博物志校証』<sup>(22)</sup>では、『三国志』の劉宋・裴松之注から、清・褚人獲の『堅瓠集』まで40種類の書籍から、合計212条の佚文を収集して載せている。この40種の書籍の中には、『一切経音義』などの仏教書も含まれるが、『義楚六帖』は対象となっていない。

『義楚六帖』が引用する『博物志』は合計3条ある。うち2条は、現行の『博物志』に類似の文章がみられ、また他の書籍にも引用があること、表1の備考欄に記したとおりである。残る1条の41番「老氏骰子」は、現行の『博物志』にみえず、佚文にも収められず、また仏典においても類似した文章がみつけれなかった。

〔老氏骰子〕『博物志』云、骰子本因老子、以卜之。

先に紹介した『列仙伝』からとして引用していた文章も老子にちなんだものであった。『義楚六帖』には、『老子』や『莊子』からの引用もある。どの程度現在の『老子』、『莊子』テキストと同じであるかは未確認であるが、それまでの仏教類書以上に雑多な知識を並べようとする傾向がみられる。また、天台宗では、外典の引用が積極的に行われ、唐・湛然『法華玄義釈籤』にも『博物志』の佚文がみえることがすでに指摘されている<sup>(23)</sup>。義楚も『宋高僧伝』巻七の伝によれば、『法華経』をよく読んだとあり、天台宗の僧侶とみなしてよいだろう。そうなると、義楚が直接『博物志』をみても不思議ではない。

## (3) 『感応伝』

『感応伝』は、『隋志』史部雜伝類及び子部雜家類に王延秀撰八巻として著録される仏教感驗譚集である<sup>(24)</sup>。著者の王延秀は『宋書』などに名前がみえ、劉宋の人であり、名門太原王氏の一員であったらしいことがわかるが、史書に伝もたてられず、細かい経歴は不明である。『感応伝』は、佚書であり、佚文は、現在『弁正論』巻七及び『太平広記』巻一百一十一及び巻一百十四（両者で内容が重複する）に残る合計2条が確認できるだけである。『義楚六帖』に引用される『感応伝』も全3条のうち表1の3番「観音愈瘻」と4番「金尊代戮」の2条は、『弁正論』からの孫引きと考えられる。しかし、もう1条の104番「鉢塔宝成」は『感応伝』から、としているが、他に類似の文章をみつけることができない。

〔鉢塔宝成〕『感應傳』云、佛令羅云、洗鉢破爲五分、諸比丘鉢亦各五分。佛令八十億菩薩不入滅度、護持正法及惡比丘。佛以鉢擲、上有頂次第而下。佛告天帝、施我真珠并天工匠。又告天魔施我七寶、又告婆竭羅龍王施我魔石珠。三七日中、造七寶塔。一時皆成、盛如來鉢塔、高四十由旬勅龍王帝釋、守護令諸末法弟子護鉢應器如護眼睛。

仏が宝物を集めて七宝塔を作ったという内容になっている。先の佚文二条は仏教信仰による瘡の治癒及び死刑の免除であり、典型的な仏教応驗譚となっているのとは比べ、あまりにも違う内容である。また、王延秀の『感應伝』とは別に、唐代には淨弁による『観音感應伝』があったようである<sup>(25)</sup>。この唐代の『感應伝』もまったく佚文資料が残っていないが、状況証拠からすれば、王延秀の『感應伝』同様、信仰により救われた話をしてきたようである。そうすると、この『義楚六帖』に引用された『感應伝』はいったいどの『感應伝』であったのか、結局わからないことになる。

#### (4) 『集異記』

『集異記』という書名の書は三種類が確認されている。一つは劉宋の郭季産のものであり、『隋志』に著録はないが、『芸文類聚』など初唐の類書に引用がある。魯迅『古小説鈎沈』に11条の佚文が収められる。あとの二つは唐代のもので、薛用若のものは上下二巻に16話を収める。また唐・陸勳も『集異記』を著したとの記録が残り、一部の佚文は、薛用若のものか陸勳のものか判然としない<sup>(26)</sup>。

『義楚六帖』には、『集異記』を出典とする三条の文がみられるが、三条ともいずれの佚文及び本文と一致しない。以下にその全文をあげる。

[1] 46番〔鑿齒送梨〕『集異記』云、習鑿齒將梨數十送與安公。安講次衆集。安手自將梨分割散衆、數無少剩。又郗超送米千碩與遠法師。齒與謝安書再二賞嘆。符以十萬師伐襄陽、得一人半矣。

[2] 74番〔口吐猛火〕『集異記』云、三國時、有人口吐猛火、先以藥在器中、取一片木與黍糠含之。再三吹吁而張口。火出因就熟處、取以爨之、則便火熾。又書紙投火不然。

[3] 111番〔紐鎧編兜〕『集異記』云、亂世以經書爲甲冑兜鍪等。

[1]には、晋の歴史家習鑿齒が登場する。[2]では、三国時代のことが話題になっている。李劍国は、唐代の『集異記』は、同時代のことしか載せないため、『太平御覧』や『太平広記』に『集異記』からとして引用される唐以前の話はすべて郭季産の『集異記』由来のものであろう、とする<sup>(27)</sup>。それからすれば、これら2条は、郭季産の『集異記』の佚文である可能性が高い。[3]は、一般的なことを述べており、いつの時代のことを話題にしているのか不明であるため、どの『集異記』のものなのか判然としない。どちらにしろ、これら3条は新たな『集異記』佚文であることはいえる。

#### おわりに

『義楚六帖』所引の志怪は、『弁正論』や『法苑珠林』といった『義楚六帖』以前の仏教

書に多くを頼っており、編者である義楚本人がオリジナルなテキストを見ていないことがわかった。そのため、『弁正論』や『法苑珠林』のような、すでに失われてしまったテキストを大量に保存しているということはなかった（ただし、これは『弁正論』や『法苑珠林』が六朝志怪そのものを閲覧して採録したことを意味するかはわからない）。しかし、『義楚六帖』を参照したことで、『弁正論』自体の版本間における出典記述のゆれの問題を浮き彫りにすることができた。

また、新たな佚文資料としての可能性があった書籍は、『博物志』や『集異記』といった雑多な知識を含んだ書であった。今回検討の対象に入れなかった『漢武洞冥記』も、引用されているのは、博物的な知識の内容である。仏教の世界であっても、さまざまな知識を外典に求める傾向があったために<sup>(28)</sup>、これらの書が積極的に引用されて、佚文が残ることとなったのではないだろうか。

今後は、『義楚六帖』に引用される『洞冥記』の整理を行った上で、さらに唐代から宋代にかけての仏教的な知の世界を探求できれば、と考えている。

#### — 注

- (1) 『義楚六帖』の基本情報については、日本における二種類の影印本（朋友書店 1979 及び臨川書店 2001）に附せられた解説・解題、また、孔毅「釈氏六帖及其価値」（『古籍整理研究学刊』1998 年 2 期）、銭汝平「仏教類書釈氏六帖考論」（『宗教学研究』2006 年 3 期）、銭汝平「仏教類書釈氏六帖版本叙録」（『図書館雑誌』2011 年 1 期）があり、本節は、これらの情報を整理して記述したものである。
- (2) 影印本が『禅学典籍叢刊』6 卷下（臨川書店 2001）に収められる。書誌の解説は、同書椎名宏雄「義楚六帖解題」を参照。また、銭汝平「日本東福寺藏宋本釈氏六帖刊刻源流考」（『図書館雑誌』2011 年 9 期）もある。両論考によれば東福寺本は崇寧二年に印刷されたものではなく、南宋中期頃の後印本であるらしい。
- (3) 山路芳範「義楚六帖考——大東急記念文庫藏本について」（『印度学仏教学研究』41-2、1993）参照。一部項目の掲載にずれがあるものの、東福寺本と内容が一致するとの報告がある。
- (4) 山路芳範「『義楚六帖校訛』考」（『仏教論叢』37、1993）参照。
- (5) 寛文九年刊本の影印本が『義楚六帖』（朋友書店 1979）として出版されている。同書の牧田諦亮「義楚六帖」及び注（2）前掲椎名解題参照。
- (6) 注（3）前掲山路論文及び山路芳範「『義楚六帖校訛』考 2」（『仏教論叢』55、2011）参照。
- (7) 山路芳範「『義楚六帖』引用典籍考——巻九から巻十二を中心として」（『仏教論叢』35、1991）。
- (8) 山路芳範「義楚六帖引用典籍考二——尼高僧伝（比丘尼伝）について」（『印度学仏教学研究』40-2、1992）。
- (9) 山路芳範「義楚六帖引用典籍考三——金藏経について」（『印度学仏教学研究』84、1994）。また、宮井里佳、本井牧子『金藏論 本文と研究』（臨川書店 2011）に『義楚六帖』所引『金藏論』記事一覧がある。
- (10) 注（2）前掲椎名解題参照。また『義楚六帖』所引『宝林伝』の佚文については、常盤大定『支那仏教の研究』（名著出版 1974）の「『義楚六帖』所引の『宝林伝』」がある。
- (11) 趙玉琦「釈氏六帖引説文考」（『書目季刊』46-3、2012）。なお論文では引用を全 18 条とするが、後述の『義楚六帖引書索引』によると『説文解字』を出典とする条は、20 条あるため、検討には一部抜けがあるようである。
- (12) 新美寛、鈴木隆一『本邦残存典籍による輯佚資料集成』（京都大学人文科学研究所 1968）。また同書は、現在 [http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~takeda/edo\\_min/edo\\_bunka/syuitu.html](http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~takeda/edo_min/edo_bunka/syuitu.html) において、テキストデー

タが公開されている。

- (13) 山路芳範編『義楚六帖引用書名索引』（朋友書店 1991）
- (14) 注（7）前掲山路論文、95 頁。
- (15) 表 1 には、出典が志怪と思われる条のみを入れたため、一部、『弁正論』、『義楚六帖』両方にみえるものの、表 1 にいれていない話がある。以下にその話と出典を記す。
  1. 「文宣降靈」（齊竟陵王内伝）
  2. 「何瑚感聖」（何氏伝）
  3. 「鷲死還鳴」（出典なし）
  4. 「宇文廢僧」（出典なし）
  5. 「謝晦破塔」（晋録）
  6. 「托拔毀寺」（崔皓伝）
  7. 「董礼劫僧」（梁後記）『義楚六帖』に引用される『弁正論』は、表中の 34 条にこの 7 条を加えた 41 条になる。
- (16) 『古小説鉤沈』では、採録条の出処を示す。そして、この 2 条については、『弁正論』のみを出典としているため、魯迅がみた『弁正論』に『宣驗記』からとして引用されていたことが確かである。
- (17) 王国良『冥祥記研究』（文史哲出版社 1999）。
- (18) 詳しくは、佐野誠子「『幽明録』・『宣驗記』から『冥祥記』へ——六朝仏教志怪の展開」（『和光大学表現学部紀要』11、2011）を参照。
- (19) 周叔迦・蘇晋仁校注『法苑珠林』（中華書局 2003）では、『冥報記』の佚文だと注記する。実際に現行の『冥報記』にはみられない。しかし、陳昱珍「《法苑珠林》所引外典之研究」（『中華仏学学報』6、1993）や李剣国『唐五代志怪伝奇序録』（南開大学出版社 1993）上巻 199 頁で指摘するように、『法苑珠林』のこの箇所に引用される 4 条は事件年からして、『冥祥記』の誤りであった可能性が高いという見解の方が妥当だろう。
- (20) 李剣国『新輯搜神後記』（中華書局 2007）で『搜神後記』の佚文として収録する。
- (21) 『列仙伝』の書誌研究及び佚文資料については、久保輝幸「『列仙伝』の亡失した仙伝 2 則について」（『人文学論集』29、2011）及び同氏「『列仙伝』の異本と譚統について」（『人文学論集』31、2013）があり、現行上下巻本にみえない佚文が大量にあることを指摘する。これらの論文では、類書に引用される『列仙伝』の佚文についての検討が行われているが、『義楚六帖』や『法苑珠林』所引の『列仙伝』については検討の対象となっていない。
- (22) 范寧『博物志校証』（中華書局 1980）。
- (23) 佐藤礼子「天台外典利用をめぐる考察——天台注釈書に引用された『博物志』のある一条より」（『六朝学術学会報』11、2010）参照。
- (24) 『感應伝』に関する基礎的な情報は、吉田隆英「『感應伝』について——仏教説話集とその周辺」（『集刊東洋学』35、1976）を参照。
- (25) 牧田諦亮『六朝古逸観世音應驗記の研究』（平楽寺書店 1970）87 頁注（23）に「統高僧伝巻二五、魏末魯郡沙門釈法力伝（六四五 c）は、法力・法智・道集・法禪などの観音應驗のことを記している。伝末に「別有観音感應伝、文事包広、不具叙之」とするのは、道宣の周辺になお観音感應伝（應驗伝）が流通していたことを示すものである」とある。また『統高僧伝』巻二十六に隋の大業の末年（618）に卒した僧侶浄弁が『感應伝』一部十巻を著したとの記述がある。注（24）前掲吉田論文も参照。
- (26) 注（19）前掲李剣国書『集異記』の項を参照。
- (27) 李剣国『唐前志怪小説史〔修訂本〕』（天津教育出版社 2005）『集異記』の項を参照。
- (28) 注（23）前掲佐藤論文参照。